子育て支援における「親子で育ち合う環境」に関する研究
― 2年間のひよこクラブの取り組み ―

A Study on the environment in which parents and children grow with child-rearing assistance
― Activity of a “chick club” for 2 years ―

三　宅　一　郎*　　立　本　千寿子**
立　花　恭　子***

（平成31年１月23日受理）

要約

本研究の目的は、ひよこクラブの２年間の実践の振り返りをもとに親と子どもの育ちを明らかにし、大学附属幼稚園における遊具や設備など整った環境を通して、親子特に子どもにとってどのような育ちに繋がっているのかを考察していくことを目的とした。

親と子の育ちを明らかにする目的から、アンケート調査と参加型観察記録による事例収集を行い、。結果として、①親の意識変化②親と子の育ちの変化③活動内容からみる物的・空間的環境の三つの視点において、カテゴリーの分類と育ちが抽出できた。

以上の結果は、先行研究で示されてきた子育て支援の在り方と合致すると共に、大学内の施設利用や大学教員との連携等を通して新たな支援の可能性が示唆された。

キーワード：子育て支援、親子で育ち合う環境、大学と幼稚園の連携
keywords：Child-rearing assistance, growing up each other by a parent and child, Cooperation of a university and a kindergarten

Ⅰ．問題と目的

子育て支援が重要であると言われるようになった背景として、文部科学省（2005）は「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」の中で「少子化、核家族が進行し、子どもどうしが集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合って活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。また､都市化や情報化の進展によって、子どもの生活空間の中に自然や広場などといった遊び場が少なくなる一方で、テレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている。さらに、人間関係の希薄化等により、地域社会の大人が地域の子どもの育ちに関心を払わず、積極的にかかわろうとしない。または、かかわりたくてもかかわり方を知らないという傾向がみられる」と、子どもの育ちに影響があることを報告している[1)]。

さらに、昨今の社会変動は親に対しても様々な影響を及ぼしている。「核家族化の進行や地域における地縁的なつながりの希薄化などを背景に、本来、我が子を自らの手で育てたいと思っているにもかかわらず、子どもにどのようにかかわっていけばよいか分からず悩み、孤立感を募らせ、情緒が不安定になっている」こと[2)]や「女性の社会進出が一般的になり、仕事と子育ての両立のための支援が進み、子育てのほかにも、仕事やその他の活動を通じた自己実現の道を選択することがで

（＊みやけいちろう　保育科教授　運動発達学）
（＊＊たてもとちずこ　こども福祉学科准教授　保育内容（表現））
（＊＊＊たちばなきょうこ　附属加古川幼稚園　元主任教諭）

きる中で、子育てに専念することを選択したものの、そのような生き方について不安を覚え、子育て期間については「自分にとってハンディキャップではないか」と感じてしまう母親」もいる[3)]。また、「物質的に豊かで快適な社会環境の中で育ち、合理主義や競争主義などの価値観の中で育った者が多い今の父親・母親の世代にとって、必ずしも効率的でも、楽でもなく、自らが努力してもなかなか思うようにはならないことが多い子育ては、困難な体験であり、その喜びや生きがいを感じる前に、ストレスばかりを感じてしまいがちである」との指摘もある[4)]。

では、こうした課題を抱えた親子に対して行うべき子育て支援とは何か。一例として、立石ら(2004)は幼稚園における子育て支援は「親子双方の育ちの場」という特徴があると主張している[5)]。そこで、本研究は、筆者が支援員として関わったH大学附属K幼稚園の子育て支援活動「ひよこクラブ」の２年間の実践活動を振り返り、親と子どもの育ちを明らかにしていくことを目的とする。加えて、大学附属幼稚園として遊具や設備など、整備された環境を有していることから、そうした物的環境が子どもにとってどのような育ちにつながっているのかを考察していきたい。

Ⅱ．研究の方法

１．アンケート調査

「ひよこクラブ」に来られている親子の実情を把握するため、同意の得られた親32名に簡単なアンケート用紙を配布し、記入してもらった。アンケート項目は小田・河内・稲垣（2010）の研究を参考に[6)]、選択項目と自由記述項目を設けた。調査は、2016年８月と2017年３月の活動日に実施し、活動後に配布したことから、回収数32部（回収率100％）であった。また、回答者はすべて母親であった。

２．参加型観察記録

対象は２年間「ひよこクラブ」に参加しており、同意を得られた親子５組である。親子と関わりながら、親と子どもの育ちに関連する事例を書きとめ、活動内容やそのときの親子の様子を記録し、分析資料とした。また、写真を撮影することや支援員間でカンファレンスを行い、事例内容を精査した。

３．保育マップ

「保育マップ」とは、「園の環境図の中に子どもたちの遊ぶ姿をイラストで描き、そこに吹き出しをつけて具体的な様子を書き表した１枚の地図」である[7)]。これにより、園内の場や遊具と子どもとの関係性を明らかにする。今回、「ひよこクラブ」の環境が子どもの遊びや活動とどう関わっているかを明らかにするため、筆者と２名の支援員でカンファレンスを行い、子どもの姿を描き出した。さらに、支援員の協力を得て、ＫＪ法を用いて、その遊びや活動における分類と育ちについても考察を行った。

Ⅲ．結果と考察

１．アンケート調査による親と子どもの姿

⑴　参加親子の実態

「ひよこクラブ」に来られている親子の年齢および家族形態は、親の年齢20～30歳代（59％）が最も多く、子どもは２歳・３歳（ともに45％）が大半を占めている。また、子どもの人数が２人という家庭が63％であり、94％の家庭が夫婦と子どもだけの核家族であった。

⑵　親の育児経験

自分の子どもが生まれる前と実際に育児を行っている今とでは、子育てに対するイメージの違いを感じている親が多く（94％）、理想と現実に戸惑いを感じていることがうかがえた。また、育児体験を問うと、他の小さい子どもを抱いたり遊ばせたりした経験がある親が多くいる一方で（75％）、食べさせたり、おむつを替えたりという子どもと密接な関わりの経験になると、66％の親が「なかった」と回答している。

⑶　子育て環境

「ひよこクラブ」以外の子育てサークルや育児教室に参加している人が多く（78％）、また家族や相談者と子どものことや子育てのことについて話

表１　「ひよこクラブ」で親が得たもの

【カテゴリー】	主な回答
知　識	・支援員から掛けて頂いた言葉で、多くの事を教えて頂きました。 ・病気のことや、大学の先生にも色んなことを教えてもらえ、子どもの運動神経のことや、指先を使った遊びは今後も役に立ちそうです。 ・お母様方と情報交換をしたり、交流がもてました。 ・私自身も、たくさんの方とお話をさせて頂く事が出来て、色々と勉強になりました。
刺　激	・自分自身の子育てをみつめ直すことが出来ました。 ・親子の絆も深まり、子どもの違う様子も見ることができ、すごく良かったです。 ・子どもが同じ年代のママさん方とご一緒させて頂き、皆さんも頑張ってらっしゃるのだと、元気をもらえる機会でもありました。
安　心	・発達や心理的に育ちが大丈夫なのかと思うことがあり、大学の先生に相談させていただく機会がもてて、大丈夫と言ってもらい、とても安心したのを覚えています。 ・園の雰囲気や先生たちの子どもへの対応など間近で見れて、子どもが入園したときのイメージがわいてきたので、参加して本当に良かったです。 ・参加されているお母様方はいい人ばかりで、気軽に話ができ、仲良くなることができました。入園後もすごく心強いです。
気分転換	・私自身、リフレッシュ出来て楽しく過ごす事が出来ました。 ・私自身もリフレッシュできて、先生や友達、幼児のみなさんやお母さん方から、元気をもらいました。
不　安	・他のお子さん達と比べ、ワガママやすぐに手が出てケガを負わせてしまったり、出来ない事（トイレなど）が目に付いたりして、不安に思うことも増えたように感じました。

表２　「ひよこクラブ」で親から見て子どもが得たもの

【カテゴリー】	主な回答
楽しみ	・子どもにとって、幼稚園が「すごく楽しい場所」となりました。 ・子どももひよこクラブが楽しい様で、「きょう、ひよこクラブ？」という言葉をよく聞くようになりました。 ・大学内の散歩がとても楽しかったみたいです。
成　長	・最初は泣いたり走り回ったりしていましたが、後半はわりとおとなしくなり、成長を感じました。 ・参加し始めた頃はじっと座って話を聞く事が出来なったのに、今ではちゃんと座って話を聞けるようになり、子どもの成長が見れました。 ・ひよこクラブで初めて体験することも多く、子どもの成長を感じることがよくありました。
刺　激	・周囲に同じくらいの年齢の子どもがおらず、いつも家族で過ごすことが多かったので、子どもにとっても刺激ある場になりました。 ・近所に児童館も無かったので、子どもを気軽に遊ばせてあげる事もできて、母も子もとても刺激になりました。 ・それまで少人数のお友達としか関わることがなかったので、ひよこクラブではたくさんの「お友達と一緒に同じことをして楽しむ」ということができたと思います。 ・幼稚園での集団生活を見せてあげる良い機会になりました。
経　験	・自宅で出来ない事をさせて頂いたり、園庭でのびのび遊んだり…とても楽しく参加させていただきました。 ・パネルシアター、人形劇、切り絵、クッキング、お散歩…たくさんの経験ができました。 ・一番の思い出はクッキング！家ではやらせてあげられることが限定していたので…

すことができている（家族・相談者ともに100％）。さらに、同年齢の子どもをもつ子育て仲間がいる（91％）ことは心強いと言える。一方で、急用時に子どもを預けられる相手となると、祖父母を対象から省いたことで、75％の人が「いない」と答えており、地域関係の希薄化が顕著であり、親が対

応に苦慮していることがうかがえる。

⑷　「ひよこクラブ」に参加してからの変容

「ひよこクラブ」への参加が「初めて」が69％で、「２年目以上」と答えた親は31％であった。次に、「ひよこクラブ」に参加しようと思った１番の理由として、「子どもの遊び仲間が欲しい」、「子どもが安心して遊べる場所」という、子どもを中心とした答えが多く見られた。また、「母園で開かれているひよこクラブだから」と、幼稚園を卒園し、母親として戻ってきた人や「来年度、幼稚園に通わせるにあたり、こちらの様子を知りたかった」というような就園を意識したものもあった。

第２回の調査で、「ひよこクラブ」の活動を通して感じたことを尋ねると、既述の参加理由とは異なり、「自分自身の話し相手や子育て仲間ができた」や「子育てについて学ぶことができた」、「自分自身がリフレッシュできた」など、子どもだけでなく、親自身の回答が多く見られる結果となった。

さらに、これまでの活動の感想や意見などの自由記述から親と子どもが活動を通して得たと考えられるキーワードを抽出し、カテゴリー別に分け集計を行ったところ、親が得たものとして、【知識】、【刺激】、【安心】、【気分転換】、【不安】の５つ、親から見た子どもが得たものとして、【楽しみ】、【成長】、【刺激】、【経験】の４つのカテゴリーに分類することができた（表１・表２）。

２．親と子の育ちが見られる事例

ここでは、「ひよこクラブ」での子育て支援における育ちが見られる親と子どもの５事例を挙げ、考察を加えていく。その際、それぞれの育ちに着目し、該当する記述を直線部で表記し、また事例ごとに通し番号を打ち、キーワードを抽出している。

○親の育ちが見られる事例①

事例１　「話してみたい」 （2016年７月７日（木）七夕まつりが終わった後も）
明るく元気なＢ児の母親と大人しく物静かなＣ児の母親。雰囲気が正反対の２人が笑顔で話をしている様子を見て、不思議に思い、筆者が尋ねると、Ｂ児の母親が以前から「（Ｃ児の母親と）話してみたい、仲良くなりたいと思っていた」[1] と教えてくれた。さらに、どうしても２人の接点がわからず、再度尋ねると、Ｂ児の母親は苦笑いを浮かべながら「お母さんの勘です」という。たまたま５月の「ひよこクラブ」活動で席が隣同士になり、チャンスと思い、Ｂ児の母親から話しかけてみると意気投合[2]。お互いに小学生の兄がいて、家族構成も同じということでより親しみが持つことができ、仲良くなったと話してくれた。

〈キーワード〉

⑴　気持ちが表現できる

⑵　お互いを知る

Ｂ児の母親の「お母さんの勘です」という言葉が物語っているように、子育て支援の場では何気ないきっかけで親同士がつながる機会がある。この事例では、Ｂ児の母親が積極的に動いたことで、Ｃ児の母親と仲良くなることができたといえる。さらに、話をすることで、お互いの共通点や子どもの話題で盛り上がるなど、楽しさを共有することができ、それが子育てにとっても良い効果をもたらすのではないかと考える。

○親の育ちが見られる事例②

事例２　「おばちゃんが遊んだろう！」
（2016年12月21日（水）親同士の仲が良いから）

Ｈ児（２歳10ヵ月）の母親とＪ児（２歳４ヵ月）の母親は「ひよこクラブ」で仲良くなり[3]、Ｈ児もＪ児やその兄（４歳）のことを少しずつであるが意識しているのか、一緒にいる姿がよく見られた。その日は、Ｊ児と兄が追いかけっこをして遊んでいると、遅れてやってきたＨ児も「けいさつかんだ！つかまえたろうか」と言って、笑顔で加わろうとした。しかし、Ｊ児を追いかけ抱きつこうとすると、Ｊ児は嫌がり、ついにはＨ児を押してしまい、しりもちをついてしまう。その様子を見ていたＪ児の母親が「Ｈはスキスキしたいんやて」[4]とＨ児の気持ちをＪ児に伝え、「じゃあ、今後は、あばちゃんが遊んだろう！Ｈを捕まえたろう！」[5]と言い、突然遊びに加わった[6]。今後はＨ児がＪ児の母親に追いかられ、笑いながら逃げて楽しそうな様子であった。

〈キーワード〉
(3)　お互いを知る
(4)　子どもの言葉・思いを理解する
(5)　遊びを提案する
(6)　子どもの手本となる

Ｊ児にとって、まだＨ児と一緒に遊ぶという段階ではなかったことがうかがえる。親としては、子ども同士も仲良くなってもらいたいという思いから、子どもの気持ちを代弁し、仲介する姿が見られるようになる。この事例では、Ｊ児の母親がＨ児の気持ちを汲み取り、Ｊ児に伝えていた。さらに、Ｊ児の母親が子どもの遊びに参入したことは驚きであった。Ｊ児の母親としては、自分がＨ児と遊ぶことで、きょうだいとは異なる友だちと遊ぶことの楽しさをＪ児に伝えたかったのではないか。事例を通して、親同士の仲が深まることで、子どもとの交流の広がりもつながると考える。

○子どもの育ちの事例

事例３　「フレームボール、とめれた！」
（2016年９月５日（月）大学の先生と身体を使って遊ぼうの活動の中で）

活動の１つに母親がフレームボールを転がし、それを子どもが踏み止めるという内容のものを行った。Ａ児（２歳10ヵ月）と母親も一緒にチャレンジするが、転がってくるフレームボールをＡ児はなかなか踏み止めることができない。それでも、転がっていくフレームボールを追いかけ、再びクレームボールを母親に渡し[7]、母親も言葉はかけずに笑顔で受け取り、また転がしていた。何回も繰り返していると、周りの声が気になったのか、Ａ児がキョロキョロと周囲を見回した。すると、ちょうど、隣の子が上手に踏み止めるところを見た[8]。その姿を見たあと、また同じようにフレームボールを母親に渡し、転がってくるフレームボールを待った。今後はピタッとフレームボールを踏み止めることができたＡ児。満面の笑顔で母親の方へ走って抱きつく。母親も「できたね」と言葉をかけ優しく頭を撫でていた。

〈キーワード〉
(7)　挑戦する
(8)　刺激を受ける

Ａ児にとって、最初は転がってくるフレームボールを追いかけていくことも１つの遊びとして楽しかったのかも知れない。また、母親の姿勢も称賛でき、決して無理に活動内容を行うのではなく、Ａ児の気持ちに応じていたからこそ生まれた事例であるといえる。子育て支援の場では様々な年齢・発達の子どもたちがやって来る。同じ空間にいることで、お互いに意識しているとまでは言えないが、遊び方や誉められている様子などから子ども同士で学ぶこともあるのではないかと考える。

事例４　「ママのぶん」
（2016年10月１日（土）附属幼稚園の運動会で）

附属幼稚園の運動会に「おみやげひろい」という「ひよこクラブ」の親子が参加できるプログラムがある。M児（３歳１ヵ月）は昨年も参加し、母親と一緒におみやげを“１個”拾って嬉しそうな表情であった。

今回も母親と参加していたが、スタートラインで母親から「あそこまで取りにいって、ママに見せてね。がんばってね！」と優しくぽんとお尻を軽く押されるM児。スタートと同時に１人で勢いよく走り出し、おみやげを“２個”拾って、満面の笑みで母親のところに戻ってきた[9]。得意気におみやげを見せるM児[10]に母親は笑いながら、「ママの分も取ってきてくれたの。ありがとう！」と誉めていた。

〈キーワード〉
⑼　自分の気持ちや思いを伝える
⑽　自信につながる

後日、M児が頑張っていた姿を母親と話している中で、スタートラインでの出来事は、運動会という多くの人が見ているところで、M児に一人でできたという自信を持ってほしいという思いがあったという。M児は見事に一人でおみやげを拾ってくることができ、その表情からも昨年とは違う成長がうかがえた。また、おみやげを２個持ってきたことについては母親も驚いており、「ママに見せてね」という言葉に反応したのか、もしくは、いつも「ひよこクラブ」のおやつで、M児が母親のものも取ってあげている姿からその経験が生かされたとも考えられる。

事例５　「まねっこポーズ」
（2016年11月30日（水）年長児とのふれあう体験から）

今日は年長児と交流する日。H児（２歳９ヵ月）も２人の年長児と一緒のグループになり、自己紹介から始まった。はじめに年長児の２人が「○○です」と元気良く言うと、H児も真似をして「Hです」と言うことができた[11]。そこで、自己紹介を終えたH児が、突然、お気に入りのポーズを決める[12]。驚いた表情の年長児に、筆者から「○○もかっこいいポーズを見せてあげて」と声をかけ、年長児の１人がすぐにお気に入りのポーズをH児に見せてあげた[13]。すると、今度はH児が年長児のポーズを真似し、そこからポーズの見せ合いがスタートする。年長児もだんだん楽しくなってきたのか、笑いながら手や足を使い、いろいろなポーズを行い、H児も笑顔で（自分の中では）同じポーズになるよう手足を動かしていた[14]。

〈キーワード〉
⑾　自信につながる
⑿　自分の気持ちや思いを伝える
⒀　刺激を受ける
⒁　自分で考える

最初の自己紹介を上手に伝えられたことでH児の気持ちに火が付いたのではないだろうか。その勢いがお気に入りのポーズとして表現され、この事例につながったといえる。異年齢交流の利点は、年下の子どもが年上の子どもの活動を見て憧れを抱き、意欲や好奇心のきっかけとなる。また、年上の子どもが年下の子どもに世話をしたり、教えたりすることで自信や思いやりを学ぶ。ふれあいを通じて、H児はいろいろなポーズを繰り出す年長児の真似をしようと試行錯誤する姿が見られ、それも１つの成長へと結びつくと考える。

３．子どもの遊びや活動から見る物的・空間的環境

子どもの遊びとは「生活そのものであるといわれるように、子どもは日々の遊びの中でさまざまな経験をする。子どもの育ちにおいて遊びが重要であるとくり返されていることの背景には、それによって経験されることが幼児の成長発達に欠かせないものであるという理解があるためである。自分の興味に基づき自発的に展開する活動としての遊びにおいて、物的にも人的にも多様なかかわりをもつことは心身の調和のとれた発達の基礎となり、また総合的な発達が期待できる」とある[8)]。また、鯨岡（2009）は「遊ぶというのは、その子の主体性が最も発揮される場面であり、瞳を輝かせて遊び込む姿のなかにこそ、その子が紛れもない一個の主体であることが具現されています。子どもの遊びは本来はその身体に根差し、その身体を揺さぶるもの」とあるように[9)]、子どもを理解するうえでも遊びは大切であることがわかる。言い換えれば、子どもの遊びを把握することは、子どもを知るための重要なプロセスである。そこで、「ひよこクラブ」での子どもの遊びや活動を保育マップで示すと、遊戯室、保育室、和室、園庭、寺田池、キンダーの森、ロックガーデン、チャイルドガーデン、大学施設（グランド・体育館・リズム室・調理室）、大学中庭芝生などで展開されていることがわかった。さらに、遊びや活動を分類すると【身体を使った遊び】、【伝承遊び】、【ふれあい遊び】、【室内遊び】、【うた・楽器遊び】、【制作遊び】、【自然遊び】の７つのカテゴリーにまとめることができた。

Ⅳ．考察

１．「ひよこクラブ」に参加した親の変化

アンケートの実施期間、また、その対象の多くが「ひよこクラブ」に初めて参加した親であったことから、「ひよこクラブ」に参加することで、【知識】、【刺激】、【安心】、【気分転換】、【不安】の５つが最初に得られる可能性があると考えられる。

さらに、２年間「ひよこクラブ」に通っている親を対象に事例を集め、キーワードごとに整理したところ、親の育ちとして、【寄り添う】、【親からの発信】、【親同士の広がり】という３つの要素を抽出した。

前者の【知識】、【刺激】、【安心】、【気分転換】、【不安】と、後者の【寄り添う】、【親からの発信】、【親同士の広がり】は決して無関係とは言い切れない。例えば、【寄り添う】ことの背景には、子育てに関する【知識】や他の親の姿からの【刺激】、子どもの育ちへの【安心】などがあると考えられる。本研究では、両者の関係性までは言及できてないが、前者が土台となり、後者が育まれていくと仮説を立て、これからの実践の中で明らかにしていく必要があると考える。

２．「ひよこクラブ」に参加した子どもの変化

親の視点ではあるが、子どもが「ひよこクラブ」に参加することで、【楽しみ】、【成長】、【刺激】、【経験】の４つが最初に得られる可能性があると考えられる。

また、２年間「ひよこクラブ」に通っている子どもを対象とした事例を集め、キーワードごとに整理すると、子どもの育ちとして、【経験】、【意欲】、【交流】の３つの要素を抽出した。

奥山（2001）は「活動を地域へと広げる体験や、地域内の施設や人材の活用は、幼児の発達に必要な経験の保障という意味からも重要なものである」と示唆している[10)]。つまり、子育て支援における活動の【経験】から、行動範囲の広がりだけでなく、他者との交流に興味関心が深まり、自分で考え挑戦しようとする【意欲】につながっていくと推察する。さらに、【交流】は同年齢だけでなく、異年齢、地域の人、大学教員や学生との関わることによる学びや発見ができたと思われる。

偶然にも、アンケート結果と事例の共通項として【経験】が挙げられている点は興味深い。今後は、親の育ちと同様に、両者の関係性についての考察を深めていくことを課題とする。

３．「ひよこクラブ」における子育て支援の特性

大豆生田（2006）が「子どもたちは人やモノ・自然などの環境とのかかわりを通して、その世界を広げていく、また、親もそうした場におけるわ

が子や園児の姿をみることで、子どもの成長発達やその時期にふさわしい生活や遊び等を理解することになり、親にとっての成長の機会にもなるのである」と述べているように[11)]、親や子どもにとって環境との関わりが育ちに重要であることは言うまでもない。そこで、子どもの遊びや活動とどう関わっているかを明らかするため、「ひよこクラブ」の環境を見ていくと、遊戯室、保育室、和室、園庭、寺田池、キンダーの森、ロックガーデン、チャイルドガーデン、大学施設（グランド・体育館・リズム室・調理室）、大学中庭芝生と、幼稚園の施設だけでなく、大学内を自由に散歩することができ、開放的に遊べる環境が整っており、大豆生田の主張との整合性があると考える。さらに、在園児と同じ空間である効果もうかがえ、園全体で「ひよこクラブ」に参加している親子を支援していることも特性として挙げておきたい。佐伯(2008)も、「子どもたちが育つ過程のなかで育っていたのは、決してその子だけはなく、その子にかかわる周囲の他児たちや、保護者や保育者など、さまざまな立場からその実践に携わっている人すべてにそれぞれの変容の姿が見られることも明らかになった」とあるように[12)]、子育て支援において、つながることで、親や子ども、支援員、地域の人、大学教員すべての人の育ちに関係していることが示されている。

Ⅴ．今後の課題

今回、「ひよこクラブ」の全体像と、親と子どもそれぞれの育ちを明らかにするところで終えている。しかし、親子間での育ちや、就園後の姿を追うことで、また違った結果が得られるのではないかと考える。また、現在の日本の育児状況を鑑みると、育児は女性が担うことがまだまだ普通とされ、国の施策において父親の育児支援や育児休業の促進がなされているが、実行されている現実は少ない。しかし、本来、子どもの育ちを考えた際、父親の育児参加はなくてはならないものであると同時に、現在の核家族等の家族スタイルでは、子どものみならず母親への支援も必須であり、子育て支援を考える際になくてはならないものであろう。今後の研究において、父親の参画にも焦点を当て検討していくことは有益であると考えている。幼稚園としての役割を果たし、どんな支援ができるか、附属幼稚園独自の子育て支援を構築することが必要であると考える。

【引用文献】

1）文部科学省ホームページ
「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102/002.htm
（2018/01/08アクセス）

2）前掲、（1）

3）前掲、（1）

4）前掲、（1）

5）立石陽子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さがの・金丸智美・荒巻美佐子・堀越紀香・砂上史子・無藤隆「幼稚園における子育て支援の実態調査」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』２、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター、2004、pp.27-37

6）小田和子・河内彩・稲垣由子「甲南子育てひろば参加者の子育て意識・実態調査からの一考察」『甲南女子大学研究紀要人間科学編』（47）、甲南女子大学、2010、pp.45-46

7）岡本拡子・新海よしみ・庄籠道子「環境図から保育マップへ　―新しい保育記録の提案と実習指導へのいかし方―」『日本乳幼児教育学会第17回大会発表抄録集』、日本乳幼児教育学会、2007、pp.32-33

8）森上史朗・柏女霊峰『保育用語辞典』、ミネルヴァ書房、2015、p.68

9）鯨岡峻『＜育てられる者＞から＜育てる者＞へ関係発達の視点から』、日本放送出版協会、2009、p.239

10）奥山順子「子育て支援にみる幼稚園教育の課題」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第23号、秋田大学、2001、p.81

11）大豆生田啓友『支え合い、育ち合いの子育て支援』、関東学院大学出版会、2006、pp.133-134

12）佐伯胖『共感　―育ち合う保育のなかで―』、
ミネルヴァ書房、2008、p.156

〈追記〉

本研究は、2018年兵庫教育大学大学院修士課程人間発達教育専攻幼年教育コースにおける、立花恭子著修士論文をもとに、論考を進めまとめたものである。